

フタオビコヤガ(イネアオムシ)

1 形態と生態

- (1)成虫の体長は 7～11mmで、羽には暗褐色の2本の横帯があります。
- (2)老齢幼虫の体長は 20～22mm で、体色は緑色です。
- (3)幼虫は葉の表面をシャクトリムシ状に歩行します。
- (4)越冬は蛹で行い、4月下旬から羽化する。その後、世代は 4～5 回繰り返します。
- (5)高温によって世代は促進され、夏期では、産卵から1ヶ月程度で成虫となります。
- (6)幼虫は、昼間には水稻の下部に、夜間には上部に多くいます。



写真 1 老齢幼虫



写真 2 蛹



写真 3 成虫

2 被害の様子

- (1)若い幼虫(1～2 齢頃)は、葉の表面を食害します。
- (2)食害初期は、白いカスリ模様となります。
- (3)3 齢以上になると、階段状の食害痕となります。
- (4)発生が多くなると、葉が食い尽くされることもあります。
- (5)幼虫の加害期間は 2 週間程度です。
- (6)幼虫の成長とともに、被害は急激に進展します。
- (7)出穂前後に食害されると、収量への被害が多くなります。



写真 4 かすり状の食害痕

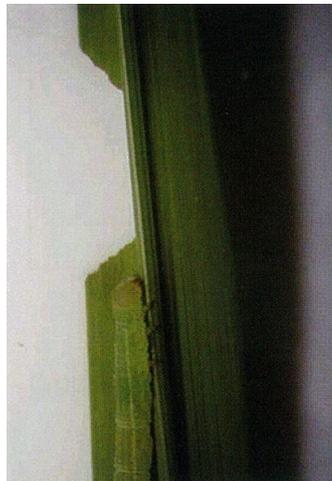


写真 5 階段状の食害痕



写真 6 多発生条件で食い尽くされた葉

3 発生について

(1)発生条件

- ア 山間山沿地域、堤防沿い、集落の周辺等、風通しが悪くて、湿度が高い水田で発生しやすい。
- イ 幼虫は高温を好む。乾燥に弱い反面、若齢幼虫期に曇天や雨の日が多いと、幼虫の発生量が多くなります。
- ウ 過繁茂、生育遅れ及び遅植えの水稻では、発生しやすくなります。
- エ 前作でイネアオムシの発生が多かったほ場では、発生しやすい。

(2)発生消長

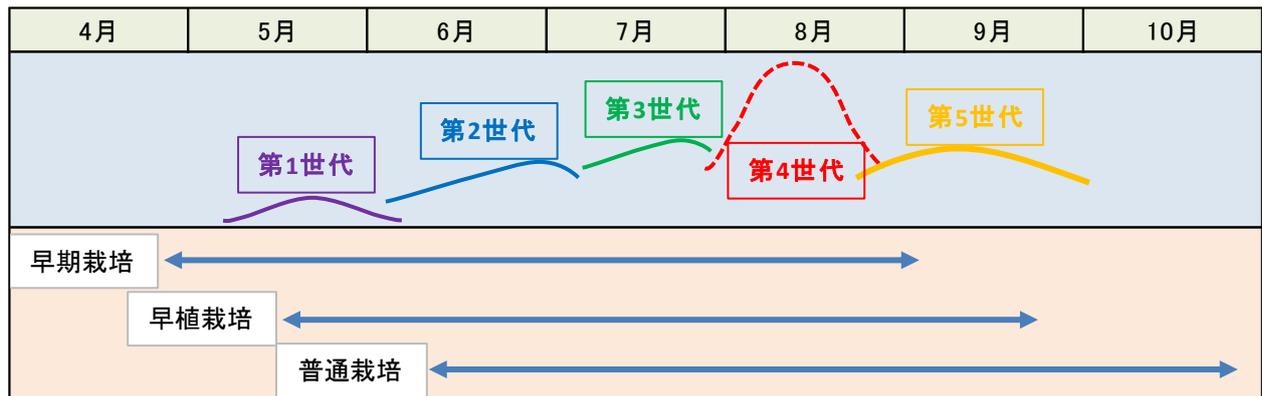


図1 フタオビコヤガ幼虫による被害量の推移(第4世代幼虫の発生は年次により異なる)

4 防除時期と防除方法

- (1) 適正な肥培管理を行い、過繁茂や生育遅れがないように注意します。
- (2) 前年発生が多い場合は、育苗箱施用薬剤を散布します。
- (3) イネアオムシは農薬による防除効果の高い害虫ですが、幼虫の成育が速く被害が急速に進展するため、防除適期を失うと大きな被害を受けることがあります。
- (4) 防除適期は、カスリ模様の食害痕が確認される時期です。これ以降でも防除効果はありますが、葉の食害被害は日ごとに拡大しますので、発生を確認したら早めに防除してください。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県